

シェイクスピア劇の言葉

散文と韻文

エリザベス朝当時、「劇作家」という呼び方はなく、劇を書く人もまた「詩人」と呼ばれていたことからわかるように、劇は基本的に詩の言葉である韻文で書くものだった。シェイクスピアは日常の言葉である散文をときおり混ぜ合わせながらも、韻文を主体として劇を書いたのである。

韻文とは、**毎行一定の韻律が繰り返される文**のことだ。

英語なら、普通の文(散文)であつても Merry Christmas, everyone! とさうぶらうに、強く読むところと弱く読むところがはっきりしていてリズムがある。このリズムが、同じように繰り返されて、

Merry Christmas, everyone!

Children playing having fun.
People dancing all night long.

Time for singing Christmas songs.

というふうには(この場合は「強・弱・強・弱・強・弱・強」というパターンが)続けば、それが韻文ということになる。一般的な英詩では、このように強制的に改行が入って一定のリズムが繰り返される。そうでなければ散文なのだ。そして、シェイクスピアの韻文の基本のリズムは弱強のリズムが各行とも五回繰り返される弱強五歩格である。リチャード三世の名台詞――

A horse! a horse, my kingdom for a horse!

馬だ！馬だ！馬をよこせば王国をくれてやる！

にしても、『十二夜』の出だしのオーシーノウ公爵の台詞――

※1 シェイクスピアが韻文のみで書いた作品に『リチャード二世』『ジョン王』『ヘンリー六世』第二部と第三部があり、韻文より散文を多用した作品に『ウィンザーの陽気な女房たち』『から騒ぎ』『お気に召すまま』『十二夜』『ヘンリー四世』第二部があるが、散文のみで書いた作品はない。

※2 iambic pentameter

If music be the food of love, play on.
もし音楽が恋の糧なら続けてくれ。
にしても、みなこのリズムになっている。
『夏の夜の夢』の幕開きのシーシウスの台詞
は次のようになっている。

Now, fair Hippolyta, our nuptial hour

Draws on apace: four happy days bring in

Another moon: but O, methinks, how slow

This old moon wanes! She lingers my desires,

さあ、美しいヒポリタ、われらが婚礼の時も

近づき、あと幸せな四日があたれば、

新月となる。だが何とゆっくり

この古い月は欠けることか！ ああ、じれったい！

なぜ弱強なのか。それは a book とか my car のように、弱強が英語において最も自然なリズムだからである。しかも五歩格という長さ

は舞台上で一気に言うのに最も適切な長さだ。六歩格以上になると息が続かなくなるし、四歩格だと歌うような調子になってしまう。

たとえば、『マクベス』第四幕第一場の魔女たちの呪文歌は強弱四歩格――

Double, double toil and trouble:

Fire, burn, and cauldron, bubble.

増やせ、不幸を、ぶぶぶぶぶぶ、

燃やせ、猛毒、くっくっくっ。

『夏の夜の夢』のエピローグも同じ韻律だ。

If we shadows have offended,

Think but this, and all is mended.

もしも我ら影法師をお気に召さずば

こう考えれば気が晴れましょう。

このように歌うような四歩格を用いることもあったが、シェイクスピアが主に用いたのは

※3 このように強弱の韻律をつけて iambic pentameter (韻律分析) とする。

※4 trochaic tetrameter

なお「あら」第五幕第一場で エアリエルが歌う Merry, merrily shall I live now (陽気に、陽気に生きようか) という歌などは強弱四歩格 (trochaic tetrameter) である。